第 127 号
2013/03/24 発行

小網代の森と干潟を守る会

小網代 森と干潟つうしん

モリちゃんとガタくん干潟デビュー

森も海も干潟も 奇跡の集水域生態系を未来の子どもたちへ
小網代の森と干潟を守る会
〒238-0111 神奈川県三浦市初声町下宮田 261-5
代表　高橋 伸和　　E-mail: info@koajiro-higata.com
TEL.046-889-0067（仲澤）
URL: http://www.koairo-higata.com
年会費：一般会員￥1000　賛助会員￥5000（入会金不要 7月～6月）
郵便振替： 00260-4-21569　小網代の森と干潟を守る会

第 113 回自然観察＆クリーン

“小網代の早春の海藻と磯の生きもの”

普段は目にすることのない、海中の森について想像をめぐらせることができる絶好の機会と待ち望んだ、小網代干潟での海藻の観察会は、穏やかな日差しの中で2月23日に実施されました。

長靴で干潟に入ると、浅い潮が全面を覆っていましたが、海藻を観察しながら、拾って歩くにはちょうどよく、濁りのない海水がとてもきれいでした。

いつもはあまり気に留めず見過ごしていた海藻ですが、講師の説明を聞きながら注意して観察すると、それぞれの種が海中で生活している様子が地上の森との比較で面白く想像できます。

海中では、深さに応じて、太陽の光が虹の色に分解されて水にさえぎられるため、全部の光が届く浅いところでは、地上と同じ葉緑素を持つ緑色の緑藻類がそだち、深いところへは赤い光しか届かないため、紅藻類が育ちます。中間の深さでは褐色の色素を多く持つ褐藻類がというように、光の性質によって育つ藻類の体色に変化がみられます。

観察して面白かったのは、2センチくらいのマリモのような丸い緑色したものが浅い岩の上にところどころ群れているのですが、これは、スガイという巻貝で、その表面をカイゴロモという藻類が覆っているもので、他の貝にはつかない不思議な関係です。

参加した小学生は、動く生きものの方が面白いらしく、ケフサイソガニやマメコブシガニをめざとくみつけたり、ボラの稚魚を追いかけたりして楽しんでいました。

冬場は海藻の成長時期で、早朝から浜に出て今日の準備をしてくれた講師の小倉さんの指導で不思議な海藻の世界を垣間見ることができました。

最後に干潟のゴミ拾いを行い、5袋ぶんのゴミと大きな空き缶を集積所まで運びあげました。

（今日観察した海藻）
ワカメ、ヒジキ、カゴメノリ、フクロノリ、ヒラアオノリ、スジアオノリ、
カヤモノリ、マルバアマノリ、アカモク、イソモク、ヨレモク、
イソダンツウ、カイゴロモ、キネハダ、シワノカワ、ピリヒバ、
フサカニノテと植物のタチアマモ
（参加スタッフ）7名、（お客様）4名でした。

文：高橋伸和　写真：浪本晴美・橋　美千代

※　観察会は NPO 法人小網代野外活動調整会議と共催で実施し、アカテガニ広場や倉庫を使わせていただきました。

参加者のメッセージ

貴重な干潟に入れる機会を頂戴して有難かったです。生き物大好きな息子もとても楽しんだようです。
ありがとうございました。
A.K様

「干潟に行きたい」とはしゃいでいた子どもが喜びました。
また来たいと思います。
S.K様

海藻（かいそう）、
海草（うみくさ）、
カイソウなどの言葉を聞いてもイメージがわきませんでした。海藻の観察会に参加して、はじめて聞く名前、日ごろ見ているはずなのに名前をまるきりしらない藻を小倉講師のおかげで１点・２点ぐらいは覚えたと思います……楽しい会でした。
須田様

海藻と磯の生き物へ参加しました。
ネットで見たという小網代が始めてのご夫妻と４年生の男の子さんを往復、バス利用でご案内しました。
マメコブシガニにも触れて、楽しかったといってくれました。
◎ 漁港の丸十丸では、生ワカメ１袋５００円で販売中です。
祖父川様

会員便り

随想　小網代てんてん　⑤

森のジャヤナギ

須田漢一

巳年に因んでジャヤナギ（蛇柳）に会おうと、「小網代学習ボランティアウォーク」に参加する。

北の尾根を下って、浦の川の流れに沿った土の道を歩く。ヒヨドリが鳴き、スズメの群が飛び上がる。前方の、黄褐色に広がるオギやアシ原の中に数本のジャヤナギが枝を伸ばしていた。

近づくと、胸高直径40センチほどの黒い幹が、下生えのササやノイバラやイボタノキなどを従えて、この地の主のように枝を拡げている。4本ヤナギと呼ばれているこのヤナギは、20年ほど前に挿し木をしたものだ、という。太い枝を分岐させた幹はその重みに耐えている。傍らにはいつの日か、何らかの力を受けて折れた太枝が地に転がって、土に還るのを静かに待っている。

この森に生を受けてから動くことの出来ない樹木は、寒暖や乾湿、夏の日照りといった四季の変化の中に身を置き、生長、生殖、結実の営みを続けている。そうしたサイクルの中で、時に、強風やどか雪などの自然の暴威に耐えねばならない。

そのストレスに打ち勝とうと、樹木は構造や形態にいろいろな工夫を凝らし、与えられた環境に適合してきた、といわれる。例えばこのジャヤナギの場合、横枝の分岐する鋭角になった部分が裂け、その跡がぎざぎざに残っている。これは、比較的強い幹側の繊維に対して、枝側の繊維を弱くしてあるからだ、といわれる。

一般にヤナギ類は強い川風がいつも吹きつけ、根元の土が軟らかな所に生育している。そうした環境で過ごすには、予想もできない不規則で大きな力を受けた場合、枝の付け根を折って幹が倒れるのを防ぐ。哀れ、と思う前にその非情さに驚く。

しなやかなシダレヤナギ類と違って、立柳類は、その一部を捨てて自らの生命を守る。ある種の昆虫や動物に見られるそうした遣り方を、本能といってよいか分からないが、ひととき逃げることによって本体を残し、再び新たな芽を伸ばす、まさに「身を捨てて浮かぶ瀬も有れ」である。もっとも、たとえ幹が折れたり倒れたりしても、根の一部が無傷であれば、そこから匍匐枝を出したり、あるいは枝から新しい幹を出して真っ直ぐに伸ばすことも出来る。

樹木の言葉を聴くことは出来ないが、何か巧みな戦略で生きている、強かさを感じる。

このジャヤナギは、人が根こそぎ切り倒したり、後から侵入する他の木や、着生植物に陽光を遮られたり、虫害、菌類による腐朽がなければ、生命を繋ぎながら生き続けられると思う。見慣れた木がいつも同じ場所にあることで、私たちは安心と安穏を得ることができる。

顔をあげる。

先の方の細い枝で、互い違いに並んだ淡褐色の芽が寒さに耐えている。

森の周りは広い。ジャヤナギよ、天に向かって伸びるがよい。

巳年の初めに願うのだった。

（2012・1／15　2／19　観察）

干潟の雑学 （6）

津免多貝（研螺貝）と砂茶碗

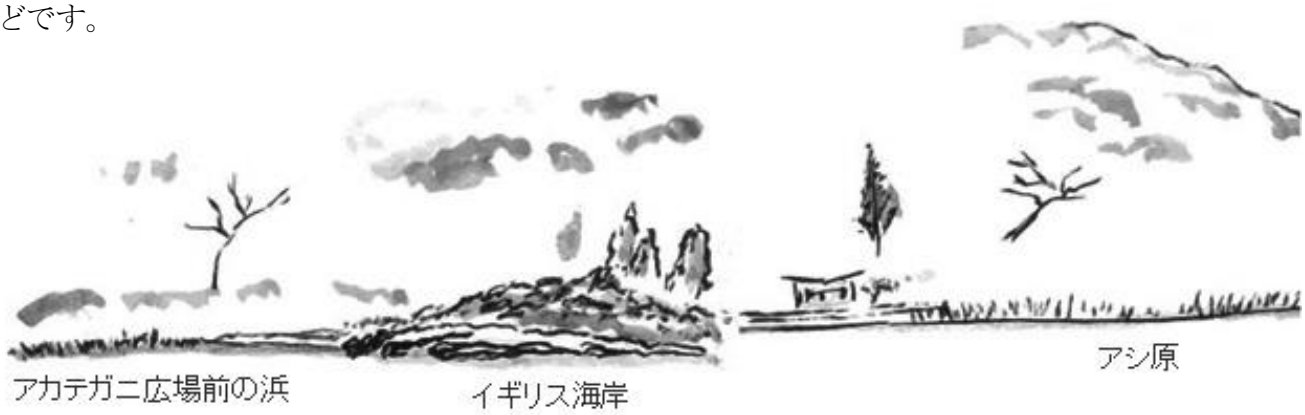
ツメタガイの軟体部

ツメタガイの砂茶碗

ツメタガイ Glossaulax didyma (Roding,1798)は小網代の干潟でもよく見られる貝で、大きく潮が引いた日には干潟の表面を貝殻が見えないくらい大きく足（外套膜）を広げて這い回っているのに出会えます。春から初夏にかけて底のぬけたおわんを伏せたような形の卵嚢が干潟でたくさん見られます。この形から“砂茶碗”と呼ばれています。英語では“sand collar”と呼ばれます。卵は砂粒をまぶした帯状の卵紐として生み出され、砂茶碗の内側の曲面は親貝の貝殻の外側の曲面と一致しています。砂茶碗はゼリー状物質で固められていて、厚さ1．3ミリから2．8ミリの中に直径520から580ミクロンの卵室が2層に配列し、卵嚢中には1から3個の直径270ミクロンの卵が入っています。したがって、1平方センチにおよそ200個の卵があることになります。この砂茶碗は約2週間でベリンジャー幼生が出てしまうと崩壊してしまいます。
ツメタガイは干潟の砂泥中を這い回ってアサリや他の二枚貝、巻貝を食べる肉食性の貝です。干潟の泥の中を這い回って餌を探すので眼がありません。
ツメタガイは大きな足で二枚貝、巻貝を包み込んで貝殻に孔をあけて貝の中身だけを食べます。ツメタガイの仲間であるタマガイ科とアクキガイ科（イボニシなど）には口吻の先端に付属穿孔器官があり、この器官からの分泌物によって貝殻の石灰質を溶かし、歯舌を使って貝殻に孔を開けます。小網代の干潟にはツメタガイに食べられた貝殻がたくさん見られます。貝殻に開けられた孔をよく見ると、ツメタガイが開けた孔は放射線状に内側に向かって狭くなっているのがわかります。イボニシなどアクキガイ科の開けた孔は円筒形でどちらの貝が食べたのかは孔を見ればすぐにわかりますが、干潟の貝を食べるのはタマガイ科の貝のようです。
ツメタガイの貝殻をよく見ると貝殻の真ん中が開いているタイプ（臍孔が開く）と閉じているタイプ（臍孔が閉じる）が見られます。これは外洋の干潟に暮らす種類と内湾、内海性の干潟に暮らす種類の違いで、外洋に暮らしている閉じているタイプはホソヤツメタとして区別されています。ホソヤツメタは横須賀市の秋谷に住まわれた貝類研究者の細谷角次郎氏を記念して名づけられたものです。細谷氏のコレクションは横須賀市の博物館に収蔵されています。小網代の干潟では両方のタイプの貝殻を見ることができます。

*右側はツメタガイ、貝殻の裏側に広く孔が開いています。これが臍孔（さいこう）です。
*左側はホソヤツメタ、貝殻の裏側は臍孔を大きな臍滑層（さいかっそう）が覆います。

ツメタガイなどタマガイ科の貝は英語ではムーンスネイル（moon snail）と言い、ツメタガイが“Bladder moon snail ”でトミガイが“White moon snail”です。
ツメタガイは煮付けやソテーにすると美味しく食べられるようです。昔から日本各地で食べられていたようで、日本でもツメタガイは各地方でさまざまな名前で呼ばれ、全国では100通り以上の方言があります。例えば東京湾の周辺部の千葉県あたりでは“イチゴ”、金沢八景、生麦あたりでは“ズベタ”、三浦郡あたりでは“マンジュウガイ”などです。



ツメタガイの仲間であるタマガイ科で小網代の干潟で見られる種にはツメタガイのほかにトミガイ、ホウシュノタマがあります。トミガイは“富貝”、ホウシュノタマは“宝珠の玉”とも書きます。中々良い名前が付いています。またこの仲間にはネズミガイ、ネコガイ、など面白い名前の貝もあります。これらの貝は相模湾の逗子、鎌倉海岸あたりでも見られます。また、ムーンスネイルに関連しては、二枚貝にもツキガイ科（イセシラガイ、ウメノハナガイなど）というのがあり、ウメノハナガイは小網代の干潟でも見られます。さらに、ツキヒガイ（月日貝）というホタテガイと同じイタヤガイ科の貝は大きな円盤状で右殻が黄白色で左殻が深紅色できれいな貝です。ちょうど月と太陽のような貝なのでこの名前がついたようです。貝の博物館などでは必ず見られると思います。

左：ツメタガイ　右：トミガイ

ホウシュノタマ

ツメタガイの仲間で最近海のブラックバスとして名前が良く出てくる貝にサキグロタマツメタという貝がいます。小網代ではまだ見ていませんが、全国的には問題になっています。東北地方では干潟の水温が2度くらいになる真冬でも動き回っているのですが、真夏には見られなくなるということなどから、この貝は中国や朝鮮半島からの輸入アサリに混入して入ってきたと考えられています。日本にも昔から有明海や瀬戸内海に分布していたのですが、大陸側の海域からの個体群と日本の個体群ではその生活習性に大きな違いがあるのでしょうか、外来の個体群は急速に分布を広げています。2011年3月11日の大震災後の調査結果が“サキグロタマツメタは地震ニモ、津波ニモ負ケズ”として貝類学会で発表されています。東北地方の干潟では密度は少し減少していますが、依然元気いっぱいであることが示唆されています。この貝は栄養卵依存型直接発生という日本に暮らす他のツメタガイ類とは異なった方法で子孫を増やしているので、サキグロタマツメタにアサリを食べられないようにするにはサキグロタマツメタのスナジャワンを回収することが効率的な駆除方法の一つです。しかし、干潟の絶滅危惧動物図鑑では絶滅危惧IAにランクされています。これは日本在来の個体群に対してのもので外来の個体群を早急に駆除しなければ日本在来の個体群が消滅してしまうということのようです。

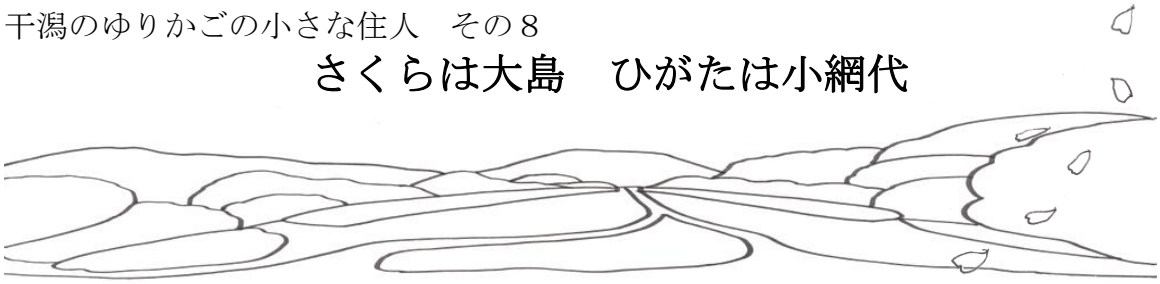
小網代の干潟ではアサリやバカガイが少なくなったためかツメタガイも少なくなっています。

参考資料：貝類学、佐々木猛智、2010，日本貝類方言集、川名興、1988，海の貝50種、奥谷喬司、1985
海洋と生物、Vol.34,No.3,2012，干潟の絶滅危惧動物図鑑、日本ベントス学会編、2012

小倉　雅實

干潟のゆりかごの小さな住人　その８

さくらは大島　ひがたは小網代



ジポーリン菜穂子

今年のおひな祭りは、いつになく寒かったですね。季節が進んでいないような寒さに、片付けるのが、ついつい遅くなってしまわれたのではないでしょうか。おヨメにいくのが遅くなってしまうそうですから、要注意ですよね。お雛さまを飾るとき、どちらがお姫さまで、どちらがお内裏さまか、みな様は迷われることはないですか。古式では、お姫さまは、お内裏さまの右にいらっしゃいます。つまり、向かって左がお姫さまです。これは、代々の天皇家にならってのことだそうですが、大正天皇も、昭和天皇も、お妃さまの右に立たれました。欧風に従われたのでしょうか。騎士道では、女性は利き腕で、男性を頼り、男性は利き腕で、愛する人を外敵から守る、と古英語の時間に教わりましたが。現代の皇室にならって、おひな様も現代風として、特に関東では、向かって右がお姫さまというのが多いようです。関西では、古式のままだそうですよ。

お姫さま、お内裏さまのずうっと下に行って、「桜」と「橘」。これも、どっちがどっちかな。おひな様用には、「右近の桜」「左近の橘」と言われていますね。これは、おひな様を飾るとき用です。つまり、向かって右に桜、左に橘を置きます。お姫さまとお内裏さまからご覧になると、「左近桜」「右近橘」ということになります。実際、京都御所の紫宸殿には、左側に桜、右側に橘が植えられています。

最初に紫宸殿に植えられていたのは、桜ではなく、梅だったそうです。何事も唐(中国)風がステキ、ということだったのでしょうね。梅が桜に替わったのは、どうやら９世紀の中頃らしいです。菅原道真の提言とも、藤原氏繁栄の基となった承和(じょうわ)の変がきっかけとも考えられるようです（『古事談』ほか）。それまでは、「花」といえば、梅だったそうなのですが、それからは「花」といえば、桜を指すようになりました。その紫宸殿の桜も、何回か植え替えられているようなのですが、1357 年には、鎌倉からやってきた桜が植えられたそうですよ（『新編鎌倉志』）。「鎌倉櫻」と呼ばれ、京都の御所では、殊の外、美しく珍しがられたそうです。南北朝の頃です。イギリス・フランスは百年戦争の真最中。中国は元で、紅巾の乱が起こっていました。

京都西陣の千本閻魔堂は、この桜が見事なそうですね。これも、閻魔堂にも「鎌倉櫻」が咲いていることを知った足利義満が、桜の保護のために下行米を下賜したのが始まりだそうですよ。

この「鎌倉櫻」が、普賢象桜。淡い紅色の花びらが幾重にも重なり、咲いていくうちに色が白くなっていくそうです。おしべが緑色で、二本、突き出ているのだそうです。これを、象の牙に見立て、その象は、普賢菩薩さまが乗られているものだと、さらに想像を広げていったゆえの名前なのでしょうね。普賢菩薩は、「普（あまね）く」私たちを救ってくださる「賢い」菩薩さまです。女人往生を説いた『法華経』を白い象にのって護ってくださる菩薩さまなので、平安の中頃、１１世紀頃から、貴婦人にたい

へんな人気があったそうです。この時代、普賢菩薩像も多く描かれたそうな。国立博物館にも国宝として残されていますね。『枕草子』や『源氏物語』の頃でしょうか。ヨーロッパでは、十字軍の頃。ローマ法王庁ではカノッサの屈辱なんて事件もあった頃でしょうか。

また、『華厳経』では、この菩薩さま、最後にご登場なさいます。文殊菩薩から勧められて、善哉童子は、さまざまな人々から教えを乞う旅に出ます。漢字の名前ですが、インドのいいところのお坊ちゃまだったそうです。そして、53 人目に普賢菩薩さまに出会い、悟りを開いたそうなのです。つまり、普賢菩薩は、究極の菩薩ということですね。さて、徳川の時代、究極の場所とは、どこでしょう。そう、天皇のいらっしゃる京都です。江戸から京都への五十三、はて、ピンときましたか。そうです！東海道五十三次です！家康公も、信心深かったのですね。東海道を、『華厳経』になぞらえているわけです。冗談ではなくホントの話です！輸送手段も仏教の教えが基になっているだなんて、なかなか面白い国に住んでいると思いませんか。

言うまでもなく、この東海道五十三次を、歌川広重は浮世絵の題材に選びましたし。さらに、ここから、国芳などは、五十三次のパロディ浮世絵を残しています。「猫飼好（みょうかいこう）五十三匹」です。題自体もダジャレで。そして、たとえばですよ、藤沢−平塚−大磯は、ブチサバ（ブチがサバをくわえている）−そだつか（子猫ちゃん育つかな）−おもいぞ（タコをくわえてるから重いぞ）といったかんじ。猫がすごいか、江戸がすごいか。人バージョンもあります。藤沢−大磯−三島は、オジサマ（鷹揚そうな男性）−おおいた（頭をぶつけたらしく、おぉ痛）−トシマ（妙齢！？の女性です）となります。おかしい。すごい。普賢菩薩さまの霊験あらたかです。

普賢象桜は、普賢堂桜とも言われるそうです。最初に、鎌倉の普賢堂で「発見」された、とされていますが、この普賢堂ってどこのことか、ご存知の方はいらっしゃいませんか。教えてくださいませんか。というのも実は、これは、普賢堂でなく、能見堂ではないか、と考えています。能見堂は、鎌倉から金沢の方に向かう山道にあったそうです。そこから見る景色が中国の瀟々八景に出てくる場所のようで、のけぞるように美しかったそう。お坊さまが、ヒミツのけぞりポイントとして、のっけ堂と呼んでいたそうなのです。のけぞるほどの景色のもと、京都からも望まれる桜を発見。話ができすぎでしょうか。そうかもしれません。称名寺にも、昔はこの普賢象桜、咲いていたそうですよ、しかし、今はもうありません。残念。

普賢象桜は、大島桜の突然変異だそうです。小網代の干潟で、あの可憐な白い花を咲かせる大島桜です。大島から鳥が運んだとも、源頼朝が流刑地の伊豆国から持ち帰ったとも。大島桜は、普賢象だけでなく、さまざまな里桜のお父さんやお母さんになっていますね。現在の紫宸殿の左近桜も大島系だそうですし。南殿（なでん）の桜と呼ばれていますね。後水尾天皇(1613-1632)が、あまりの美しさに、何度も車を返して別れを惜しんだとされる「御車返しの桜」も大島系。一重か八重かを確認したかったから、とも言われます。京都府京北町常照皇寺にあります。ほかにも「楊貴妃」に「関山」「鬱金」「一葉」「白雪」「御衣黄」などなど。多彩な名品を生み出しているそうです。江戸の園芸文化の立役者ですね。ソメイヨシノは言うまでもありません。さくらどら焼きでおなじみ、三浦海岸桜まつりの河津桜も、大島一家の一員です。

大島桜は、白い花が緑の葉っぱと一緒に出てくるので、本当に爽快でありながら、気品がありますね。鎌倉に居を構えていた、昭和の誇る批評家、小林秀雄は、家から見える桜を「青い葉っぱを無闇に出し白っぽい花をばらばらにつける」と表現しています（「さくら」）。これは大島桜のことでしょう。同じく鎌倉文士のひとり、立原正秋は、「山桜の頃」

で、こんな風に書いています。「山桜の葉は赤っぽいものもあれば、緑色のもある。花も白、うすくれない、とある。それらの花と葉の色がたがいちがいに交錯し、そのいろどりのなかで野鳥が啼いている。花冷えの淡い午後の陽のなかで、その風景を眺めていると、ああ、ことしも山桜にであったな、という感情になる。」「至福だ」そうです。ここでいう山桜とは、山でさりげなく咲いている桜、あるいは、ソメイヨシノではないグループ、ということでしょうね。葉が赤くて花が薄紅の桜は、そのとおりの山桜でしょう。そして、葉が緑色で、花が白いのは、大島桜でしょうね。きっと。実際に鎌倉の祇園山ハイキングコースを歩いてみると、立原正秋の描く通りの景色に出会いますね。

源実朝公(1192-1219)は、奥方さまがお公家のご出身だったせいもあるのか、花見がお好きだったようですね。『吾妻鏡』に、永福寺（ようふくじ）まで車を仕立てた、と描かれています。永福寺は二階立てだったので、二階堂とも呼ばれ、それが今の地名として残っています。草ぼうぼうの場所だったところを、今では、永福寺復元計画が鎌倉市により、すすめられています。どんな桜が咲くのでしょうか。大島桜も交じると、よいでしょうねえ。鎌倉三浦、南関東らしくて。明るくて。可憐で。

春ふかみ　花散りかかる山の井は　ふるき清水に蛙鳴くなり

実朝公の歌集『金槐和歌集』の句です。なんだか、まるで小網代の干潟やアカテガニ広場を詠ったかのようです。

実朝公がお生まれになる少し前、あの名だたるサクラ・マニアの西行法師も、鎌倉においでになっていることが『吾妻鏡』にあります。鎌倉・三浦はどんな桜景色だったのでしょうねえ。海岸や干潟にも下向されたのでしょうか。『山家心中集』に、

風吹けば　花さく浪の　折るたびに　さくら貝よる三島江の浦

という句があります。実際には大阪の淀川流域だそうですが。さて、これを、つい「三浦江の島」と読み違えてしまうのは、私だけでしょうか。

参考にした本：
『古事談』新日本文学大系 41（岩波書店:2005）
『大日本地誌大系　新編鎌倉志・鎌倉攬勝考』（雄山閣:1929）
松岡恕庵『櫻品』（文求堂:1891）
森ひでお『京都の寺社と花木と気象』(文芸社:2003)
『桜』日本の名随筆 65　竹西寛子編（作品社:2006）
稲垣進一『江戸のあそび絵』（東京書籍：1988）
『西行全集』久保田淳編　（日本古典文学会:1990）

待ってました！小倉さんのディープなコーナー！！

さくらは大島ですか、鎌倉桜も出てきますね。

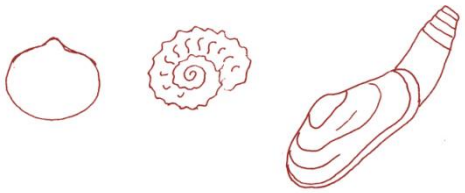
　大島桜、鎌倉桜という和名の貝はありませんが、江戸桜という名前のサクラガイがいます。

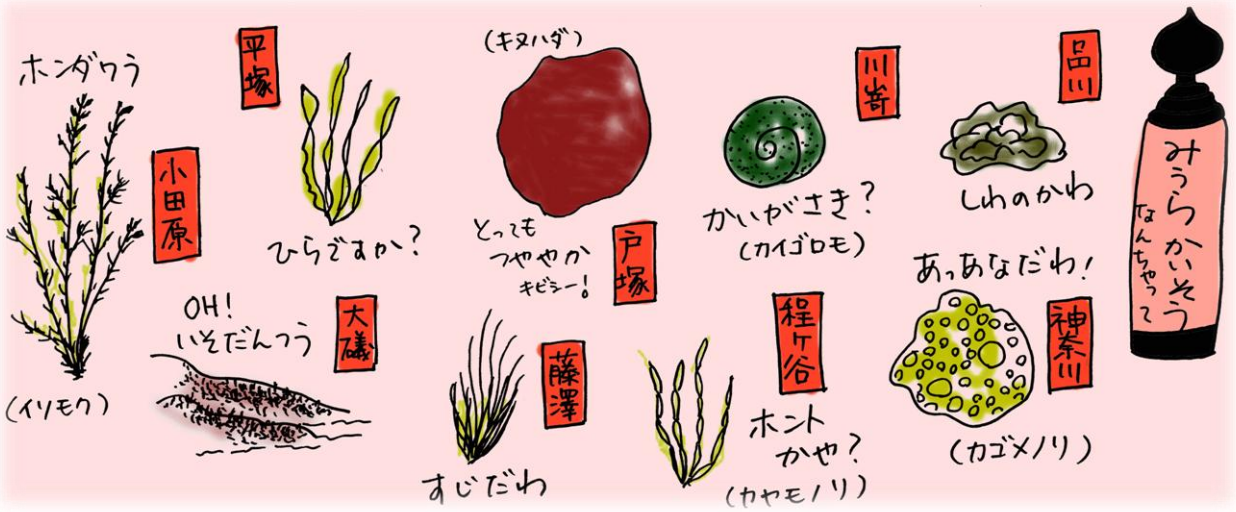
　江戸桜はモモノハナガイという名前で呼ばれます。モモノハナガイはサクラガイよりも濃い桜色をしています。このグループには小網代でも見られるユウシオガイも入っています。

　サクラガイの仲間は日光貝科に分類されています。その中でサクラガイ、ウズザクラ、カバザクラなどは美しく輝く太陽を意味するラテン語の属名のグループに分類されます。

　花の和名を持つ貝にはウメノハナガイ、フジノハナガイ、チリボタン、ナデシコガイ、シラギクなどたくさんあります。江戸時代までの日本の貝類図鑑には花の名前だけではなく、ステキな和名が使われています。漢字で書かれているのも気に入っています。たとえば、汐小波貝、忘貝、花丸雪、衣通貝（この貝を見て衣通姫を連想？）などです。ウメノハナガイ、シラギク、衣通貝は小網代の干潟にも暮らしています。

　小網代の桜の花ももうすぐですね。





小網代詩人

春のきざし

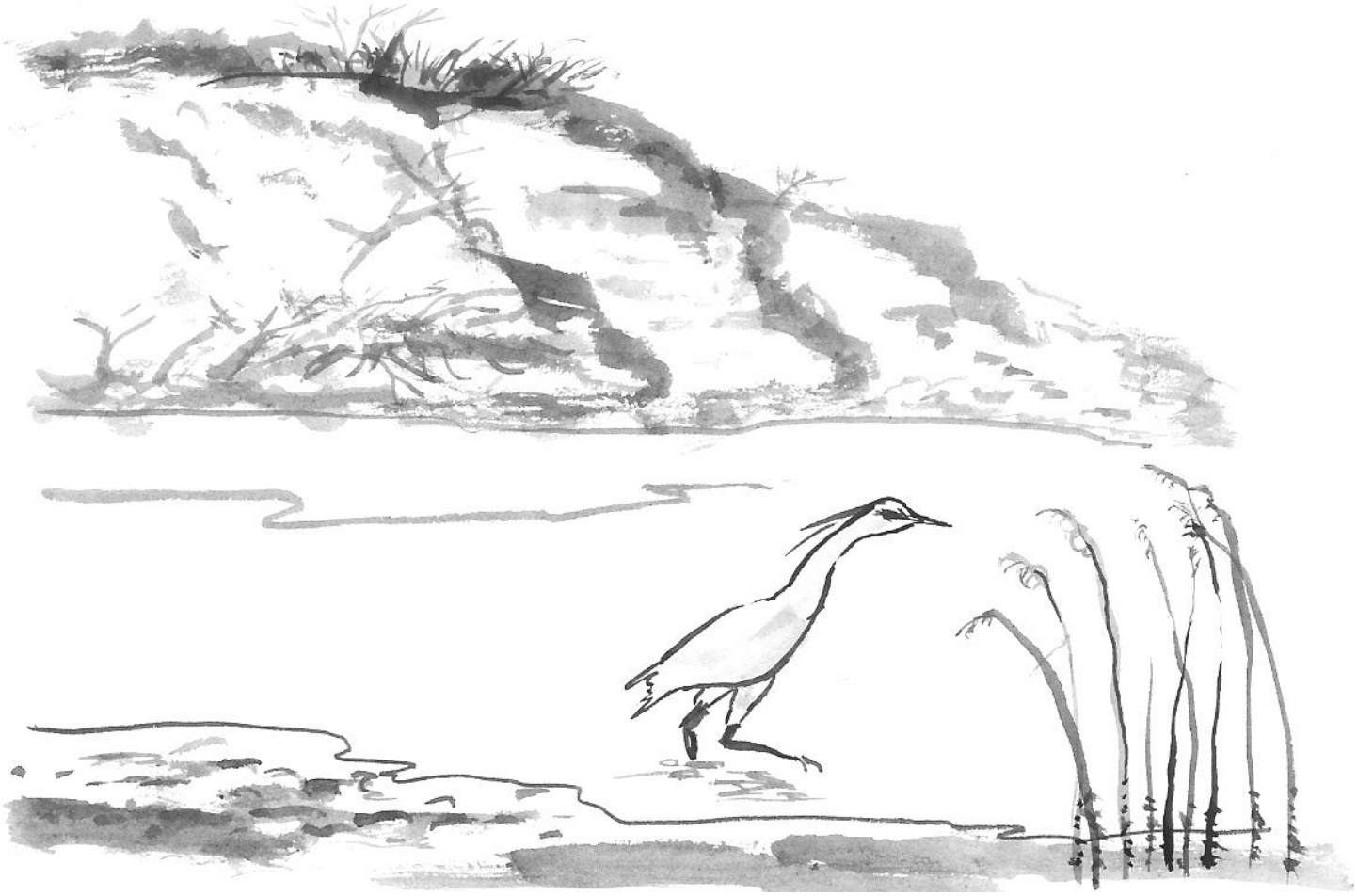
中井　由実

東京に　何度も雪が降った
寒い寒い　今年
冷たい風が　指先を切るようだ

寒い　寒い
まだ

なのに　干潟にひたひたと寄せてくる浅い波は
その下に重い泥をたくしこみながら
春の兆しを映している
空に向けた水のおもてが　薄陽をうけて
いつになくやわらかく見えている

春が　海から来る
小網代の明るい季節のはじまりが
潮に乗って　干潟にやってくる



スタッフコラム

◆ **谷津干潟**～～行ってみなければわからない！

もの凄い強風の吹いた平成 13 年 2 月 16 日に谷津干潟探鳥会が実施されました。参加者は小網代の森と干潟を守る会の仲間 10 人です。

谷津干潟は、千葉県習志野市西部に位置し、1970 年代に周囲が埋め立てられ、東京湾最奥部に住宅地と道路に囲まれた面積約 40ha の長方形の海として残った干潟です。折しもこの干潟は、2013 年にラムサール条約登録 20 周年を迎えるそうです。この日は、まず、観察センターによってレンジャーの方から話を聞き、当干潟の周囲 3.5km を双眼鏡片手に楽しく探鳥しました。

この干潟は、東京湾と 2 本の川でつながり、潮の干満と同時に海水が干潟に流れ込みます。そのため、潮がひいて陸地が現れると、ゴカイ、カニ、シジミなど多くの生物が生息しているので水鳥がえさを求めてやってきます。

現地に行く前写真を見たときは、狭そうな干潟だなーと思っていましたが、実際行ってみると、さにあらず、この干潟は泥を多く含んだ泥干潟であること、豊かな自然環境に恵まれていること、面積も予想以上に広く、シギ、チドリ類やカモメなど鳥類にとって極めて重要な渡りの中継地及び越冬地として貴重な場所だということがよくわかりました。

この様な自然環境を反映して、谷津干潟ではチドリ目 69 種を含む 201 種が確認されているそうです。

当日、私達が確認した野鳥は次のとおり 21 種でしたが、やはり春秋の渡りの時が圧倒的に種類は多いようです。

特に今回、みんなで感動しながら見た鳥は、細いくちばしと非常に長いピンクの足でスマートな姿のセイタカシギを 10m程の距離からゆっくり観察できたことです。思わず万歳！圧巻でした。

『当日確認できた種類』　　合計 21 種類

カイツブリ、イソシギ、アオサギ、ヨシガモ、オナガガモ、ヒドリガモ、セイタカシギ、コガモ、スズガモ、ホシハジロ、アメリカヒドリ、オオバン、ハシビロガモ、ハクセキレイ、ムクドリ、モズ、ツグミ、キジバト、ハシブトガラス、ハシボソガラス、スズメ

（文・写真　鈴木清市）

◆ 池の岩　雨にもめげず　カエルが二　本物論争　飛び込みで　結

＜2012年11月17日　例会参加解散後記＞

「今日は少なくとも10数種の限られた植物を丹念に見て行きます。10回やれば100種の植物は覚えられます。」そのようにして覚えていくのが早道だと、今日の講師のSさんは開口一番、話してくれました。アカテガニ広場の周りを特徴ある植物の見分け方などを説明しながら10時から雨の中の昼をはさんで2時まで熱心に教えて下さいました。

聞いていただけで見たこともない植物を教えてもらい、久々に脳が動いたなと思われる観察会でした。解散後、自由にいろいろ、見ながらアカテガニ広場に戻ろうとしていた時のこと。

はじめに　別荘池の小さな岩の上で池に生えている緑色の浮き草を体にまとい動かないカエルの形を発見したのはNさんだった。

「あれ？あれは本物？それとも　誰かが置いたの？」と声をあげたのだった。どれどれとみんなが集まってきて、じっと、小さな池にある岩を見つめる。

「OOさん、あなたがカエルの置物をあそこに置いたんですって！」「いいえ、そんなことしてません。」それぞれが思惑ありげに　近くの人を挙げて「あなたがやったの」と声を出す。

そのうち、岩の上にいるカエルだけではなく、その先端に同じようにじっと固まっているカエルの形を見つける。2匹！も！　段々、置物説が遠ざかっていく・・・。

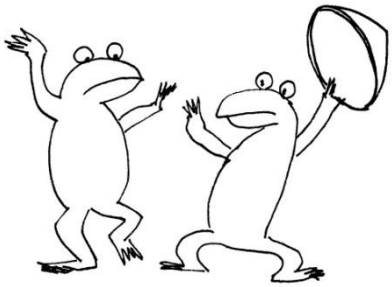
本物、置物の論争がはげしくなったころ、じっと双眼鏡でカエルを見ていたTさんが「あっ」と声をあげ、「瞼が動いた！　本物だ！」と、言ったのだが、じっと固まっているのは変わりが無い。あんまりみんなが広場に帰らないので、とうとうSさんも戻ってきて本物・置物論争に加わる。

動けば本物、では、動かしてみよう。「秀吉」が中に一人いた。枯れた竹でつついてみようと池の横から差し出そうとしたとたん、ボチャン！　「ああっ」という声、本物だと悟った見物人が一斉に声をだしたのだ。岩の先にいたカエルが動いたらしい。続けて岩の上にいたカエルもボチャン。「秀吉」の出番はなく、大笑いの仲間の場所へ戻ったのだ。

緊張に続いての大笑い。1年分、笑ってしまった。今日の観察会の一番のハイライトは、皮肉にも干潟の植物の学習が終わった後の別荘池の観察にあったのだった。

10数種類の海岸の植物は笑いと共に、頭に残ったのは言うまでもない。

M.M



◆ 横須賀市のたろんフエアへ参加しました

市長が37歳と若いです。小網代へ誘いたいものですね。

ブース出展が80店近くありました。特に興味があったのは・・・。

原子力空母ジョージ・ワシントン、10万トンのコーナー

乗組員は3200名、航空要員は2480名、搭載機は85機

原発2基分を搭載、機関の蒸気タービン4基を運転。

現在、寄港停泊中で原発は停止、外部基地からエネルギーの供給を受けている。

ビデオで出航の様子を公開してました。

S.S

カニグッズ（4）

No.5　ベトナム　バッチャン焼きの飾りかに

かにのコレクションは20年に亘り　いろいろな方からいただいたものです。中型コンテナーにぎっしり4箱あります。数えてはいないのですが、数千点はあると思います。その中でも、この大型のバッチャン焼きのかにのふたつき容器は、かにの姿を模したカニグッズの中でも一番大きく、ずっしりと立体的にできています。中でも花の模様飾りが特徴的です。バッチャン焼きの特徴のさわやかな赤、黄色、緑色で彩られたカニは美しく穏かな感じ、数あるカニコレクションの中でもピカ一のものです。

これは、今小網代の森と干潟を守る会の代表である高橋伸和さんが川崎の輸入雑貨のお店で手に入れたもの。TVでベトナムの陶器を尋ねる番組を見ていたら、ベトナムのバッチャン村ではほとんどの村民が焼き物関係の仕事に従事。大きな壷を型にいれて作っている場面や植物を堂々と大きく絵付けしている場面が感動的でした。古くから日本の茶道との関連も深く、注文に応じてトンボの柄などの陶器も多く焼かれていたとのことでした。

慶應義塾大学教授の岸由二氏の退職を祝い、新しい氏の門出にしていただこうと会からのお祝いの品物として用意しました。末永く岸先生のご活躍とご健康を見守る置物として飾って頂けたら幸いです。なお、この焼き物は背中が蓋になっていて、中にはおにぎりほどの品物が入ります。中にはネクタイを忍ばせて置きました。勿論、柄はカニです。こちらもご愛用いただけましたら小網代の森と干潟の会スタッフ一同、大変嬉しく思います。

おっと、皆様　これは岸先生には内緒にしておいて下さい。ヒ･ミ･ツ！

かにコレクター　宮本　美織

小網代の森と干潟を守る会の活動

12/1　小網代 森と干潟つうしん No.126 印刷・発送（横須賀市 市民活動サポートセンター）

12/1　スタッフ会議（横須賀市 市民活動サポートセンター）

12/8　横須賀市 自然環境講演会参加（岸由二氏講演：「樹林地の適切な維持管理」、
於：横須賀市自然・人文博物館、）
NPO 法人小網代野外活動調整会議と共同で出展

12/16　NPO 法人小網代野外活動調整会議ボランティアウォーク支援

1/20　NPO 法人小網代野外活動調整会議ボランティアウォーク支援

2/2　きらら賞授賞式参加

2/9　多摩三浦丘陵シンポジウム NPO 法人小網代野外活動調整会議と共同で出展

2/9-10　のたろんフェア 2013 出展（横須賀市 市民活動サポートセンター）
フリマスペースでの販売ご協力ありがとうございます。

2/16　谷津干潟探鳥会

2/17　NPO 法人小網代野外活動調整会議ボランティアウォーク支援

2/23　第 113 回自然観察＆クリーン「小網代の早春の海藻と磯の生きもの」

ご寄付ありがとうございます

会の活動費　須田漢一様　ミサゴ様　松本智之様　タイキ様　浪本晴美様

森の応援金　ミサゴ様　松本智之様　小倉雅實様　高橋伸和様　宮本美織様

以上の方からご寄付をいただきました、ありがとうございました

のたろんフェア 2013 参加記

横須賀サポートセンターを利用して活動している諸団体の交流イベントが２月９日と１０日の２日間実施され、フリーマーケットに出展参加いたしました。

当日は農業高校から仕入れたパンジーの苗や皆様から応援いただいた品々と会の頒布品などをところ狭しと並べ、クイズ参加のスタンプラリーの出題とご褒美のシールを用意してお客様をお待ちしました。

実行委員長の挨拶の後、開始のカウントダウンが始まり３，２，１，０でスタート、開始前から入場していたお客様たちが、すでにめぼしをつけた売り場で早速買い物の値引き交渉がはじまりました。

センター内外の会場での催しにたくさんの方がみえてにぎやかでした。クイズに答えてスタンプを集めるスタンプラリーの参加者には、小網代の森のクイズに答えていただき、来春の森オープンを説明させていただきました。外人さんへのクイズ出題にはちょっとあせりました。

写真参加では NPO 法人小網代野外活動調整会議の、森での活動風景が「みどりで賞」を受賞、はがき大の賞状をいただきました。

来年も参加を予定していますので、またのご協力をお願いいたします。

文・高橋 伸和　写真・浪本晴美

小網代の森と干潟を守る会 ホームページのご紹介

小網代の森と干潟を守る会の公式ホームページ、今回は会員専用ページの概観をご紹介。
次回はサイトの入口、トップページをご紹介します。

会員ページの
ログイン画面。
お知らせしているユーザーID とパスワードを入力してください。

ログインすると、持ち帰り自由の写真ギャラリーや、岸先生の講演録、総会の報告、会の連絡先などの会員限定情報にアクセスすることができます。

http://www.koajiro-higata.com

google や yahoo で、「こあじろひがた」を検索するとすぐに見つかります。

まるで本のページを繰るように読むことのできる **Book 版つうしん。**
ホームページ版ではカットされている情報もノーカットのカラー版です。

* ID とパスワードをお忘れの方は kohou@koajiro-higata.com へメールでお問合せください。
メールのタイトルを「パスワード請求」とし、メール本文にお名前とご住所、またはお名前と会員番号を必ずお書きください。会員資格を確認後、メールで ID とパスワードをご連絡いたします。

第 113 回自然観察 ＆クリーンのお知らせ

主催：小網代の森と干潟を守る会　共催：NPO 法人小網代野外活動調整会議

◆小網代の春を感じよう

春の観察会は鳥たちのさえずりを聞きながら小網代の森の外周を歩きます。木々の新緑、咲き競う野の花、その花に集まる虫たち、また、活動を始めたばかりの小網代のアイドル「アカテガニ」など、ゆっくりと観察しましょう。小網代湾の干潟では、潮の状況が良ければさまざまなカニ達がお出迎えしてくれるでしょう。
さまざまな「色」を楽しめるこの季節。ゆったりと流れる時間。ゴールデンウィークのひと時、ぜひ小網代の森と干潟で楽しく過ごしましょう。
持ち物は長靴、お弁当、飲み物、雨具、小さなお子さまは着替えもあると安心です。そのほか図鑑や虫眼鏡、双眼鏡などの観察用具もあるとより一層楽しめます。

日　時：2013 年 4 月 29 日（昭和の日）　*小雨決行
集　合：10:00 京浜急行三崎口駅改札前
　　（トイレがありませんので必ず駅で済ませてください）
講　師：矢部 和弘氏
持ち物：本文下部に記載しています
申　込：当日現地で受け付けします
参加費：無料
※ ごみ拾いボランティアもいたしますので、汚れても良い服装でご参加ください。
お問い合わせ：046-889-0067（仲澤）

NPO 法人小網代野外活動調整会議からのお知らせとお願い

小網代の森と干潟を守る会は NPO 法人小網代野外活動調整会議の活動を支援しています。

トラスト緑地保全支援会員＆小網代応援団募集

◆トラスト緑地保全支援会員になるには

トラスト財団のパンフレットにある申込書に記入して郵送します。またはトラスト財団のホームページ（http://ktm.or.jp）から、申し込むことができます。支援したい緑地にはぜひ「小網代の森」をお選びください。
通常のトラスト会費（大人 2000 円、中高生 1000 円、小学生 500 円、家族会員 3000 円）の他に 3000 円の支援会員会費が必要です。 小網代の森をよろしくお願いします。

◆小網代応援団に入るには

NPO 法人小網代野外活動調整会議（電話：045-540-8320　E-mail: koajiro@koajiro.org）までお問い合わせください。
「小網代応援団」に登録していただいた方には、年に数回の特別観察会をご案内いたします。森と干潟の様子をしっかり見守り、楽しみながら、大好きな森を育てていきましょう。

小網代　森と干潟つうしん　　NO.127　　2013 年 3 月 24 日発行
森も海も干潟も　奇跡の集水域生態系を未来の子どもたちへ
小網代の森と干潟を守る会
〒238-0111 神奈川県三浦市初声町下宮田 261-5
代表　高橋 伸和　　E-mail: info@koajiro-higata.com
電話　046-889-0067（副代表　仲澤）
URL: http://www.koajiro-higata.com
年会費：一般会員¥1000　賛助会員¥5000（7 月～6 月　入会金不要）
郵便振替　口座　00260-4-21569　　加入者名　小網代の森と干潟を守る会
＊ 既に退会のご連絡をいただいた方にも年度末（6 月末）までお届けしております